

埋文にいがた

MAIBUN

新潟県埋蔵文化財センター

MAIBUN
NIIGATA

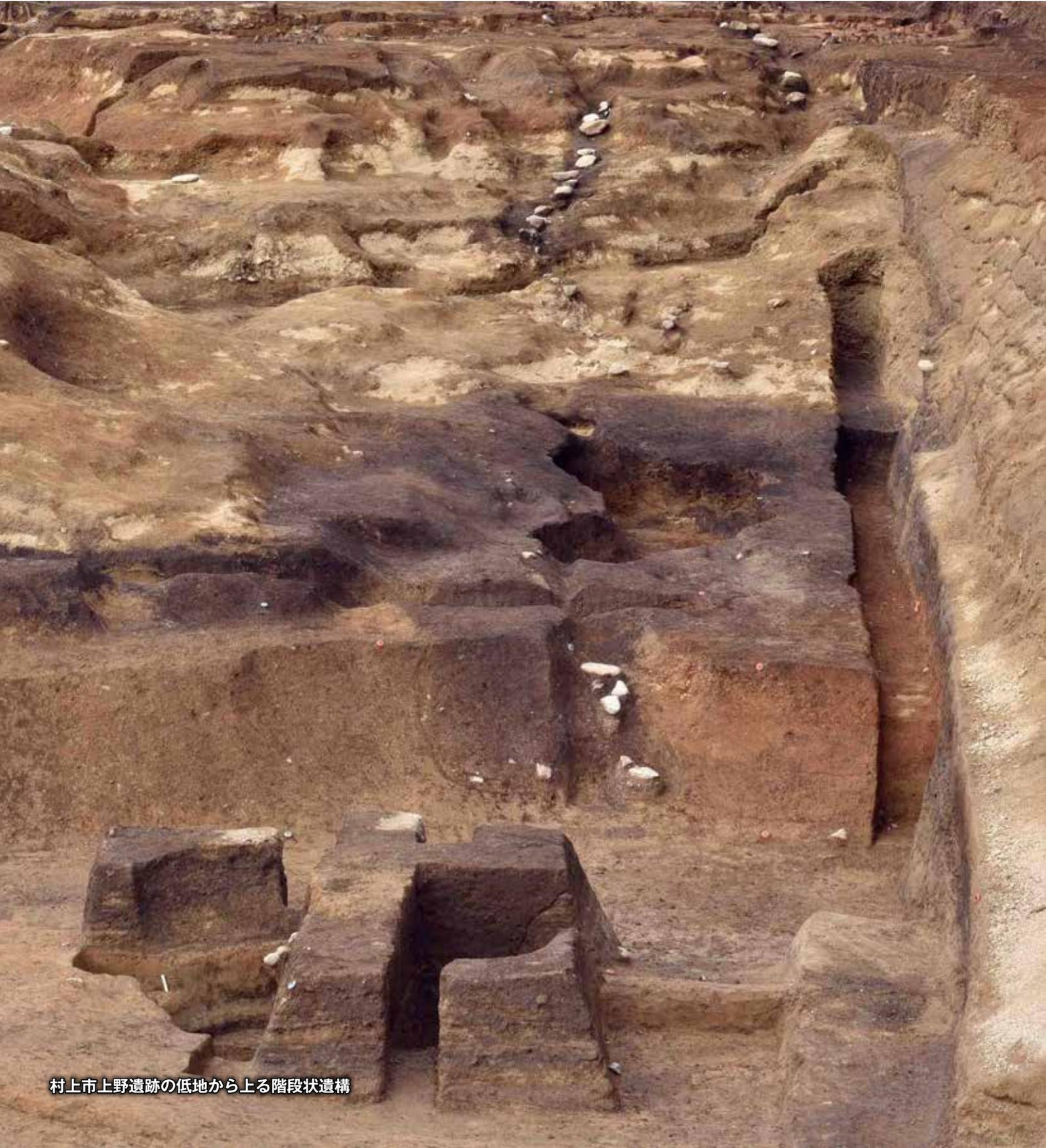
2020 Dec.

第113号

発掘調査
整理遺跡
紹介

村上市上野遺跡

催事紹介 令和2年度冬季企画展「発掘！新潟の遺跡2020」



村上市上野遺跡の低地から上る階段状遺構



2020年度
発掘調査
遺跡の紹介

かみの 上野遺跡Ⅳ

— 縄文時代後期の大集落 —

所在地：むらかみしるさわ ひばら
村上市猿沢・檜原地内

かみの
上野遺跡は国道7号朝日温海道路の建設に伴って2017（平成29）年度から発掘調査しており、今年度は4回目の調査となります。約4,985㎡を対象に調査を開始しましたが、遺構・遺物が多く、一部は次年度に実施します。

遺跡は高根川右岸の丘陵裾部に立地します。北西から南東へ緩やかに下る扇状地ですが、西側の山地が崩壊したことによる土砂も流れ込んでいます。遺跡は、居住域や廃棄場のある集落部と、南側の低地に堆積した砂礫部と大きく分けることができます。今年度は集落部と、砂礫部の一部、その砂礫部につながる斜面部を調査しました。集落部の標高は約35～39mです。これまでの調査で、縄文時代後期前葉を中心とした遺跡であることがわかっていますが、今年度の調査でも同時期の遺構・遺物が多く見つかっています。

集落部では、縄文時代後期前葉（約4,000年前）の遺物包含層が4層（4群）あり、黄色系（Y層）と黒色系（BK層）が交互に堆積しています。またそれより下にも縄文時代前期中葉頃の遺物包含層が1層あります。遺構は石囲炉、土坑、ピット（小穴）、埋設土器、集石・配石・立石、溝、焼土などがみつかっています。石囲炉や焼土の大半は、建物に伴うものと考えていますが、まだ明らかになっていません。自然流路SR103は廃棄場として利用され、居住域に隣接するように長さ約50mに渡って築かれています。また居住域と南側の低地をつなぐ斜面部で、道と思える遺構が見つかりました（表紙写真）。自然にできた溝を利用して、

石をいくつか階段状に置いて歩きやすくしています。その道（階段状遺構）を降りた先で、土坑（貯蔵穴？）が2基見つかりました。道と土坑が同じ時期に築かれたものか検討は必要ですが、当時の土地利用の方法がわかる貴重な事例と考えています。



三十稻場式と南三十稻場式の特徴を持つ土器

遺物は土器・石器・土製品・石製品などがあり、収納箱（内寸 54×34×10cm）で1,400箱以上も出土しました。土器の型式は、新潟県に広く分布する三十稻場式と南三十稻場式が中心で、両者の特徴を持つ土器も出土しています。縄文時代後期前葉にほぼ限定されることから、他の遺物の時期を決める参考にもなります。深鉢・浅鉢・注口土器・鉢・台付鉢・ミニチュア土器などがあり、土製品には土偶、耳飾、土錘などがあります。

石器はたくさんの種類が出土しました。石鏃・石匙・石錐・打製石斧・磨製石斧・板状石器・石錘・石皿・磨石類などがあり、石製品では石棒・線刻礫などがあります。

上野遺跡は約4,000年前の縄文時代後期前葉の遺跡で、土器の特徴などから、短期間に生活していた集落と思われます。多量の遺物が短期間に生産・消費されていることから、多数の人が同時に生活していた可能性があります。（石川智紀）



遺跡遠景（西から）



SR103廃棄場の清掃作業（西から）



2020年度
整理作業
から

かみの
上野遺跡Ⅱの整理状況

所在地：村上市猿沢・檜原地内

かみの上野遺跡は村上市猿沢・檜原にあります。国道7号朝日温海道路（日本海沿岸東北自動車道の一部）建設に先立ち2017（平成29）年から発掘調査を継続中です。今回ご紹介する整理作業は、平成30年の2回目調査のものです。

集落の時期は約4000年前の縄文時代後期前葉です。遺構は^{たてあな}竪穴建物（住居）1棟と埋設土器、土坑など少数でしたが、遺跡内に自然流路があり、上流部の集落から流れたものや近くで廃棄されたものを含め多量の遺物が出土しました。

整理作業の一つに復元した土器の図面作成があります。土器の形や模様を計測し、特徴を正確に表現します。土器の表面には粘土を貼りつけた飾りや縄文などもありますが、土器と同じ大きさに印刷した写真を基に鉛筆で文様を丁寧に描いています。土器を図化して他の資料と比較できるようにし（写真1・2）、各遺構にどのような特徴の



写真1・2 土器の図面作成／実測作業

土器があるか、その系統や時期差などを比べることができます。土器の観察から、新潟県で縄文時代後期の^{さんじゅういなば}三十稲場式と呼ばれる土器型式の新相から、次の時期に主体となる^{みなみさんじゅういなば}南三十稲場式の古相にほぼ限定されることが分かってきました。地元^{つなとり}の土器に加えて東北地方の綱取式、^{みやと}宮戸式などの文様が見られます。さらに長野県に分布の中心を持つひんご式は、胴部の主文様に渦巻を描く鉢形土器です。これらの土器の出土は、当時の交流の広さを裏付けるものです。

土器と並行して石器も分類しています。とても珍しい石器があります（写真3）。写真の右2点は普通の大きさの^{だせいせきふ}打製石斧です（右：長16.6cm）。それと形は似ていますが、細長く扁平な泥岩製の^{でいがん}打製石器です。主に薄く剥がれる性質の石材でたくさん製作しています。打製石斧のように土掘り具として使うには小さくて薄く、耐久性に難がありそうです。また、写真左上2点には両端と中ほどに擦切りで付けた切れ込みがあり、紐で縛るように作っているようです。今のところ用途は分かりませんが、装身具や祭祀具と判断するには慎重な意見があります。今後、周辺の遺跡や類例を調べたいと思います。

現地調査の様子は、埋文にいがた第106号（平成31年3月）にあります。記事は当事業団ホームページでもご覧いただけます。（田海義正）



写真3 用途不明石器と打製石斧2点（左上：長55mm）



埋文
コラム

マツリの道具
— 形代 —

形代とは、『広辞苑（第6版）』では「神霊が依りつく依り代（しろう）の一種」とされていますが、ここでは本物の代わりに作られたもの全般を指します。その形状は人形、動物形、武器形、舟形など多様です。形代は遺跡からも見つかり、古墳時代では、土製、石製、金属製のものが多く、律令体制の確立期にあたる飛鳥時代以降は木製のものが主流となります。いずれも他の祭祀遺物と一緒に見つかることが多く、マツリの道具として用いられたと考えられます。特に、木製形代は、「大宝律令」「神祇令」に規定される国家的な祭祀（律令的祭祀）で欠かせない道具となります。

形代は、新潟県内の遺跡からも多く見つかっています。例えば7世紀後半の田上町行屋崎遺跡では、河川跡から依り代としての役割が想定される齋串とともに土製人形、土製動物形が見つかっています（写真1）。律令祭祀具である齋串と古墳時代以来の祭祀具である土製形代が混在しており、律令祭祀への過渡的な様相を示しています。

一方、7世紀後半でも行屋崎遺跡よりも1段階新しい遺跡である新潟市秋葉区大沢谷内遺跡では、谷へ続く斜面から齋串とともに木製舟形・鏝形（やじりがた）が見つかっています（写真2）。両遺跡とも水辺での祭祀行為の痕跡ですが、古墳時代的な様

相を色濃く残す行屋崎遺跡から、より律令的な様相が強い大沢谷内遺跡へと祭祀の形態が徐々に変容した様子が垣間見えます。近接するこの2遺跡の遺物から、祭祀形態の変遷が示された点は、大きな調査成果の一つです。

こうした形代を用いた祭祀行事は、現代の神道儀式（しんとうぎしき）に引き継がれています。6月30日の「大祓祭」（おほはらひまつり）（半年の穢れ（けがれ）を祓（はら）い、夏の暑さを乗り越えるための儀式）では、①人形に自分の名前を書いて息を吹きかける。②「祓（はら）い給（たま）え清（きよ）め給（たま）え」と唱えながら身体の悪い部分に人形を当てる。③川や海に人形を流す。という儀式を執り行います（写真3）。時代が移り変わってもなお、人々の安寧（あんねい）を願う気持ちは不変であることがわかります。

（田中祐樹）



写真2 大沢谷内遺跡出土木製舟形
（新潟市文化財センター提供）



写真1 行屋崎遺跡出土土製人形
（田上町教育委員会提供）



写真3 人形に自分の名前を書く

参考文献

相田泰臣2018「越後平野における古代の祭祀関連遺跡とその様相」『平成30年度史跡古津八幡山弥生の丘展示館企画展』1



埋文
インフォ
メーション

冬季企画展「発掘！新潟の遺跡2020」と
第24回遺跡発掘調査報告会について

冬季企画展「発掘！新潟の遺跡2020」

令和2年度に発掘調査・整理報告を実施した各遺跡の最新の成果について、出土品とパネルで紹介いたします。展示品の多くが初公開となりますので、お見逃しのないよう、ぜひお越しください。

- ◆ 日時：令和2年12月25日(金)
～令和3年3月28日(日)
9：00～17：00
*12月29日～1月3日は休館
- ◆ 会場：新潟県埋蔵文化財センター
(新潟市秋葉区金津93-1)
- ◆ 展示：村上市上野遺跡、村上市竹ノ下遺跡、上越市館遺跡、上越市下割遺跡、南魚沼市金屋遺跡、南魚沼市六日町藤塚遺跡・坂之上遺跡の出土品・写真パネルなど
- ◆ 観覧：無料



写真1 上越市 下割遺跡 作業風景
(縄文時代～中世)



写真2 南魚沼市 六日町藤塚遺跡 出土土器
(古墳時代の高杯)

第24回遺跡発掘調査報告会

前半は、令和2年度に発掘調査を行った各遺跡の最新成果について、発掘担当者がスライドで解説します。後半は、「上野遺跡と土石流」と題するシンポジウムを行います。

- ◆ 日時：令和3年3月7日(日)10：00～15：30
- ◆ 会場：新潟県埋蔵文化財センター研修室
【令和2年度調査成果報告】10：00～11：30
 - ・村上市竹ノ下遺跡 (古代・中世)
 - ・上越市館遺跡 (古墳時代・古代・中世)
 - ・上越市下割遺跡 (縄文時代～中世)
 - ・南魚沼市六日町藤塚遺跡・坂之上遺跡 (古墳時代)
- 【シンポジウム「上野遺跡と土石流」】
11：30～15：30
 - ・村上市上野遺跡の調査成果報告
 - ・上野遺跡の土石流
 - ・県内の遺跡調査で発見された災害痕跡
 - ・パネルディスカッション
- ◆ 参加費：無料
- ◆ 定員：30名 (事前申し込みが必要)
1月12日(火)～受付開始。定員になり次第締切



写真3 村上市 上野遺跡
低地から上る階段状遺構 (縄文時代)



県内の
遺跡・遺物
111

きゅうにいがたぜいかん
旧新潟税関

昭和44年6月20日 国指定史跡

遺跡所在地：新潟市中央区緑町3347番地1ほか

遺物保管：新潟市文化財センター（新潟市西区木場2748番地1）

安政5（1858）年、国（幕府）はアメリカ・オランダ・イギリス・ロシア・フランスの5か国と修好通商条約を結び、5港を開港しました。新潟港はその1つで、旧新潟税関庁舎は唯一現存する開港当時の運上所（税関）です。昭和44（1969）年に建物は国重要文化財（旧新潟税関庁舎）に、敷地は国史跡（旧新潟税関）にそれぞれ指定されました。庁舎は昭和45～46（1971）年に解体修理され、運上所開設当時の姿に戻りました。

税関の主な業務は輸出入貨物の監督や関税の徴収、外交事務です。旧新潟税関は、明治2（1869）年～35（1902）年までは新潟税関、同年11月からは横浜税関の新潟税関支署、昭和30（1955）年に東京税関へ移管され、閉鎖期間を挟みつつ昭和41（1966）年5月まで約1世紀にわたり利用されました。開港当初は運上所と称し、明治6（1873）年に新潟税関と改称されました。新潟市では、創建時の姿に復元するよう整備を進めてきました。その中で分かったことなどをいくつか紹介します。

信濃川方面が税関の正面です（写真1）。信濃川の旧河道と荷上場の石段や石積護岸を、平成8～9（1997）年の確認調査で発見された遺構を基に、ほぼ同位置に復元しました。操業時は荷上場が信濃川の川岸でした。石段は税関最終段階の7段に、石積みの復元は絵図を基にしました。

石庫は明治2年に保税倉庫として建築され、昭和38（1963）年に老朽化に伴い将来の復元を前提に解体されました。昭和56（1981）年に使用可能な部材を用い、ほぼ同位置に復元しています。

平成28～29（2017）年の整備は、史跡外に消火用の貯水槽を設ける必要があり、予定地の試掘調査で新たな発見がありました。この地はアシが茂り、波寄せる川べりでしたが、開設にあたり約1.5haを出島のようにするため、約1.8mの盛り土造成がされました。明治2年2月に着手し、同年

8月には庁舎を上棟するなど急ピッチで進められました。土層の観察から、盛り土は非常に良い土が使用されたことが分かりました。また、造成地の土層約40cmは良質のシルト層、その下は海浜砂と思われる砂層でした。この砂層で湧水することから、地下水の逃げ道として意図して土質を変えたと考えられます。さらに、この砂層の中位付近に幅30cm・長さ2.5m以上の板材が組まれた状況で発見されました（写真2）。造成に関する工事の跡と考えられます。このため貯水槽は、遺跡への影響が最小になるよう設計変更し、平成30年に史跡の追加指定を受けました。

急ピッチながらも精巧に建設された税関の姿を、本市の歴史とともに見学いただければ幸いです。

（新潟市文化スポーツ部歴史文化課 朝岡政康）



写真1 信濃川方面から見た旧新潟税関



写真2 板材が組まれた状況で出土した様子
青い土の上面が盛り土の地表面



埋文にいがた 第113号 令和2年12月25日発行

発行 新潟県埋蔵文化財センター Niigata Prefecture Archaeological Research Center

指定管理者：公益財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

〒956-0845 新潟市秋葉区金津93番地1 TEL:(0250)25-3981 FAX:(0250)25-3986

E-mail: niigata@maibun.net URL: https://www.maibun.net/



『埋文にいがた』のバックナンバーは（公財）新潟県埋蔵文化財調査事業団 HP でご覧いただけます。上の URL からご確認ください。